

## 継体天皇と古代

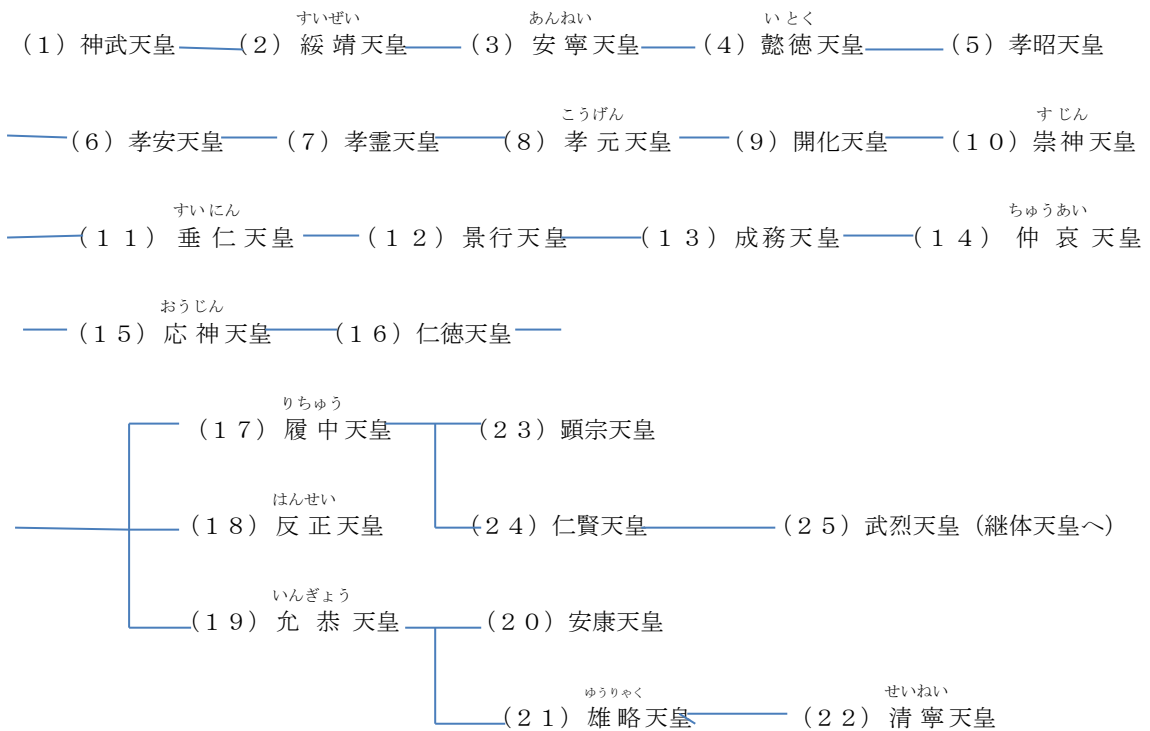
今回の話は、古代のヤマト王朝時代、古墳時代の真ただ中、飛鳥時代の前に登場されます26代継体天皇を中心に日本の皇統について語って見たいと思います。

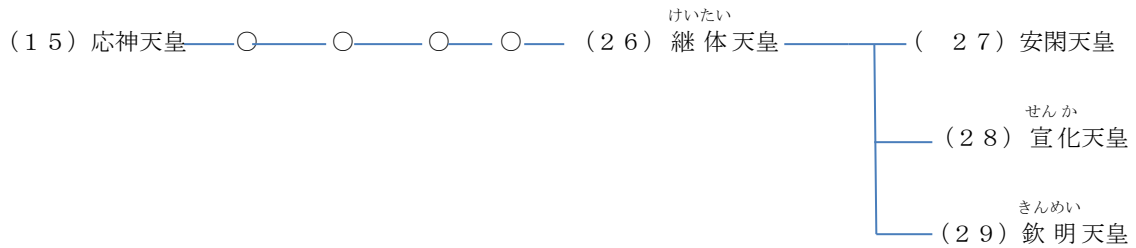
継体天皇を26代としましたのは日本書紀によるものです。

この時代の天皇のことは古事記、日本書紀に頼ることになります。しかし古事記も日本書紀も奈良時代の初め（8世紀の初め）に編集された記録で、継体天皇以前（3世紀末から6世紀初めの天皇）のことは実在の天皇かどうかについても不確かで、内容が史実かどうか学会で論議が続いています。

現在語られている説に基づいて語ります。

先ず、日本書紀による天皇系図を見てください。





繼体天皇は和名は男大迹（又は彦太）です。繼体は死後に贈られた漢風諡号（しごう）で、神武天皇から奈良時代初めまでの天皇の漢風諡号は8世紀の中ごろに作られたものです。

ここでは我々にはなじみがあります漢風諡号の天皇名を使うことと事にします。

又当時は天皇と言わず“おおきみ”（大王）とか“すめらみこと”と言っていました、ここでは天皇と称します。

繼体は西暦で450年生まれ、531年没（82歳）、即位は507年で58歳の時でした。

繼体天皇は日本書紀によると15代応神天皇の五世孫となります。応神の後は第四子の仁徳天皇が継ぎますが、その子孫は25代の武烈天皇が子がなく途絶えてしまいます。

そこで当時の大臣や大連（おおみ おおむらじ）（天皇に次ぐ執政者）が相談して15代の応神の子で仁徳の血統以外の子孫を探してきたのです。

その子孫は4代天皇に就いていません。繼体は5代目で推挙され天皇になりました。

日本書紀ではお父さんの名は彦主人（ひこうし） となっていますが、前の3代の名は記していません。分からないのでしょうか。

天皇系図で2代（父、祖父）が天皇でなくて天皇に即位した方はいますが、4代も天皇でない筋が天皇になったケースはありません。

繼体のお家です。

お父さんは近江（滋賀県）の豪族です。繼体は近江の高嶋郡で生まれましたが、お父さんが亡くなった後、お母さんの里である越前で育ちました。

繼体は長じて近江（滋賀県）、越前（福井県）、美濃（岐阜県）、尾張（愛知県）を代表する連合の首長となり、更に山城（京都府）から淀川水系（琵琶湖から大阪湾）を抑え、朝鮮諸国とも結びついていました。

当時のヤマト朝廷（倭王権）とも関係を結んでいた実力首長でありました。

「当時はヤマト朝廷の天皇の継承は必ずしも血縁でなく、実力主義であった。戦いで継承を得るのではなく、豪族たちの推挙によるものであった。

このような時代背景の中で継体はヤマト政権の豪族たちに推挙され、天皇に就いた。継体が応神天皇の五世孫とは日本書紀が作り上げた話である。」

との説があります。

ここらへんから「継体と応神とは血縁関係がないのではないか、継体はそれまでの王朝と別王朝」との説が多くなっています。

それでは継体の皇位継承までのヤマト王権にはどのような天皇がおられたか、いや本当に存在した天皇なのか又継体天皇との関係についての議論を見てみたいと思います。

古事記、日本書紀（合わせて記紀と言う）の上記天皇系譜を参照ください。

一つ目の説です。

万世一系現天皇家は神武天皇を初代として男系血脈で連綿と続き今上天皇（令和天皇）で126代である。

明治政府はこの説を取りました。当時も異論がありましたが、昭和の軍国主義時代はこの説が絶対となり、これ以外の以下の説を称える人は罰せられました。

この説を支持する人は現在少ないです。

二つ目の説です。

初代神武天皇も、以後の2代目<sup>すいぜい</sup>綏靖から9代<sup>かいが</sup>開化天皇までは存在しなかった。

2代目から9代までの天皇は記紀でもほとんど天皇の存在だけを記すだけで天皇の活躍の事象を記していない。

神武天皇については九州からのヤマトへの東征について詳しく記述されているが話も荒唐無稽で127歳まで生きたなどありえない。

9代目までは創作である。

三つ目の説です。

10代<sup>すじん</sup>崇神天皇から<sup>ちゅうあい</sup>仲哀以降が実在した天皇である。崇神は3世紀後半の人と比定される。

崇神に与えられた称号は「はつくにしらすすめらみこと」であって日本書紀

では“御肇国天皇”、古事記では“所知初国之御真木天皇”記述されており、初めて国を統治した仁となっている。初代天皇は崇神天皇である。初代の神武から9代の開化天皇の存在を否定。

この説を称える人はかなりいます。

ただし、崇神は120歳、神功皇后の段では神功が住吉神宮と交わって応神天皇を生むなど物語要素が多く、存在の信頼性がうすいとの反論があります。

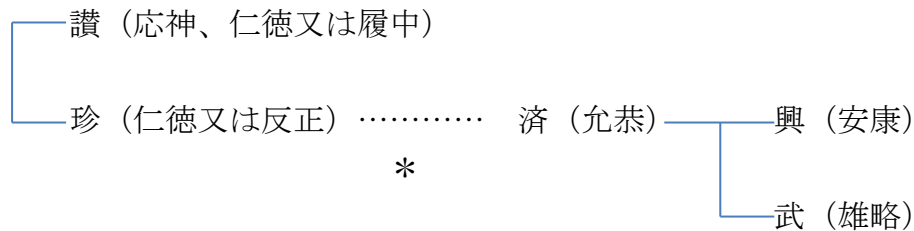
四つ目です。

15代応神天皇から21代武烈天皇です。

ここから外部史料で存在が確認される天皇が現れます。

倭王（天皇）が中国の宋に朝貢します。宋の記録（宋書倭国伝）から倭の五王「讚・珍・濟・興・武」についての記述があります。

この王が記紀のどの天皇に当てはまるか検討された結果、濟は19代の允恭<sup>いんぎょう</sup>天皇、興は子の20代の安康<sup>あんこう</sup>天皇、武は同じく允恭（濟）の子の21代の雄略<sup>ゆうりやく</sup>天皇であることが分かって来ました。しかし讚は15代応神、16代仁徳、17代履中か、又珍も16代仁徳か18代反正か確定できません。



\*宋の記録ではこの間は血脈なし。記紀では仁徳と允恭は親子、反正と允恭は兄弟

それでもこの時代の記紀記載の天皇が実在の人であったことは間違いないでしょう。

しかし近年の説では、「宋の記録では賛と珍は兄弟で珍とその後の濟（允恭）とは血縁関係がない」と読めると言っています。

武（21代雄略天皇）の後25代武烈天皇で親子又は兄弟での継承が途絶え、応神五世孫の継体天皇となります。（記紀によると）

継体については上述しました。継体が今日の天皇家の祖先であることは間違いありません。

しかしそれ以前の天皇は存在自体の有無、又継体と血脈はあったのかどうかは上述の通り種々論議があります。

何せ当時のことは文献史料では古事記と日本書紀に頼ることが多いのですが、記紀は8世紀の初めに編集され、帝紀（天皇の係累）や旧辞（蘇我氏の家伝）を元に行っていると行われますが、両方とも現存しません。記紀は神話を含み6世紀までのことも荒唐無稽の話が多く、更に8世紀初めの天皇家や藤原氏に都合のいいようにまとめられているとのことで、戦前の学会でも史料価値を低く見る人が多かったのです。

戦後は記紀の史料価値をまったく認めない風潮でしたが、最近では全く無視ではなく、使える部分もあるとの評価です。

現在では万世一系天皇家（男子の血統が皇位を継承）は継体天皇（507年即位）からとの説が多くなってきています。

高校の教科書では邪馬台国女王卑弥呼のことは出てきますが、天皇は継体天皇からです。倭の五王のことは上記の内容で記載されています。

継体天皇からの説を取りましても現天皇家は1500年以上続く王朝家であって現在世界で他に比を見ない長期を誇ります。

継体天皇はだれもが認める実在の仁です。それ以前にも大王がいたことは間違いなくでしょう。しかし日本国が統一されたのはいつなのか。記紀の神武天皇即位年ですと、西暦で紀元前660年となります。女王卑弥呼は紀元244年没の方となります。しか卑弥呼と記紀の天皇との結びつきが分かりません。

現在の論調は継体以前の天皇は実力主義で、豪族によって推戴されて即位し、必ずしも血脈による継承でなかったとの説が出ています。

やんごとなきすめらみこと（高貴な天皇）のお話です。戦争前の軍国主義の時代ではこのような文章を書くだけで監獄行でした。

どうぞお好きな説を又独自説を開陳してください。今は罰せられません。

以上

2020年1月11日

梅 一声